

小慈小悲もなき身にて・・・

この11月に初めてニューヨークに渡りまして一月以上経ちましたが、なかなかまだ落ち着きません。それは、見るもの聞くものが、今まで経験してきたものと大いに趣が異なることもありますでしょうし、また毎日大都会の落ち着きのなさ、騒がしさに包まれて生活しているということもありましょう。街中を歩く人々の足はとても速く、大阪で育った私でさえもその速さに驚いています。また街角のいろんな所に、「HOMELESS, HELP ME. ホームレスなのでお金を恵んで欲しい」とダンボール紙に書いて座り込んでいる方をよくお見かけします。一昨日は隣の州の小学校で、銃乱射によって大勢の幼い子供や大人が殺されたという大変悲惨な事件が起きました。そのようなアメリカ社会の中で、私自身もこれからどのように暮らして行ったらいいのか、いろんな煩惱が私を苦しめ、不安にいたします。正に「三界無安 火宅の如し」(法華経)(この世は不安だらけで、火に包まれた家のように煩惱は益々燃え盛る)であります。

しかし、そのような自他共に煩惱うずまく落ち着きのなさ、不安の真っ只中におきまして、私は大変幸せなことがございます。それは、静坐法の師、岡田虎二郎先生がおっしゃいました、「まあ、黙ってお坐りなさい。」の一言です。毎朝30分必ず坐ります。腰をしっかりと立て、吐く息をゆっくり長くして、下腹(丹田)を充実していきます。ただそれだけあります。そして、その後、読経します。その中で親鸞聖人がお作りになった和讃と蓮如上人(親鸞聖人の子孫で八代日本願寺の主)のお書きになった御文(御文章)を必ず声に出して読みます。

今回NYに来てから、特に次の和讃をしきりに口ずさむようになりました。

小慈小悲もなき身にて 有情利益(うじょうりやく)はおもうまじ

如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき

意味は、小さい慈悲さえも持ち合わせないこの身で、自分の力で以って衆生(生きとし生けるもの)を助けようなどとは思いません。如来(真実のお慈悲のはたらき)の大きな願いの船がなければ、この苦しい現実世界の海をどうして自他共に渡ることができようか。

じつと静かに坐って考えてみますれば、私は徹頭徹尾自分のこの身がかわいいのでありまして、他の苦しんでいるお方や、動物に対して、自分のことのように到底慈悲の心を運ぶことはできないのであります。そういう自己中心のエゴに満ち溢れたこのわが身が、幸いなるかな、親鸞聖人の教説に出会いましたお蔭で、この身このまま、煩惱だらけの穢い身のままで、如来の大きな願いの中に生かされておりましたという発見、喜びであります。

蓮如上人は御文の中で、繰り返し次のようにおっしゃっています。

「それ当流の安心(あんじん)のおもむきというは、あながちにわが身の罪障のふかきによらず、ただもろもろの雑行(ぞうぎょう)のころをやめて、一心に阿弥陀如来に帰命(きみょう)して、今度の一大事の後生(ごしょう)たすけたまえと、ふかくたのまん衆生をば、ことごとくたすけたまうべきこと、さらにうたがいあるべからず。」(御文 第四帖 第12章)

訳してみますと、親鸞聖人の教えてくださった安心を得る道といいますのは、あながちに、自分の身の煩惱による罪、障りの深いことにはかかわりなく、ただその煩惱を自分の力で以って何とかしよう滅ぼそうと、様々な善行を励まなければならぬという心をやめて、ただ一心に素直に阿弥陀如来の願いに深くうなずいて、どうかこのどうにもならぬわが身の根本的な救いを阿弥陀さんにお任せするころ一つが定まれば、もう何も心配する事はありませんよ。どうかどうか、阿弥陀如来の願い、つまり、そのまま来い、わしをたのめーという願い一つに素直にうなずいてくれー、ということであります。

阿弥陀如来といいますのは、こちらがどんな罪深い穢い自己中心的な人間でありましても、それにかかわらず無限に障りなくはたらいて下さっている無量の大慈悲心のことです。それが人間の形をしたお像となって阿弥陀如来像になり、南無阿弥陀仏という名号、つまりお名前になっているのです。そのお心にうなずき「南無阿弥陀仏」と唱えることを念仏と申します。

来年の真宗の法語カレンダーの表紙に、金子大榮先生(真宗大谷派・東本願寺の僧侶、1881～1976年)のお言葉が載っていました。

「念仏とは自己を発見することである。」

お念仏とは、阿弥陀如来の「汝を救うぞ」というお心に、素直に「はい」とうなずいて、「南無阿弥陀仏」と唱えることです。これほどシンプルなことはございません。しかし、この阿弥陀さんのお心に「はい、私の一切をあげてお任せいたします。」と素直に成り切れるのでしょうか。これほど難しいことはありませんね。それには、静坐するなりして心を落ち着けて、仏の教説を聴聞しにいかなければなりません。仏の教説を聴聞するという事は、他ならぬこの自己を発見しに行くことでもあります。自己を発見するという事は、煩惱に狂わされ、迷わされ、闇から闇へと流転の生活を繰り返している、自力で以ってしてはいかんともしがたい小慈小悲もない自己の発見であり、それがそのまま、如来の願力、つまり我々には計り知れない無量の慈悲のおはたらきに、もうすでに生かされていたんだーという自己の発見でありましょう。この発見において、この現実世界である娑婆の苦海を、静かに念仏しつつ安心して渡っていける一道があるんだよ、という大きな願いがかけられている存在がこの人間であると思います。合掌(ご感想、ご質問を下さいませ。 mikinakura87@gmail.com まで。)